

「勝利の方程式」の確立に向けた コーディネータ活動

折 登 一 隆
NPO法人グリーンテクノバンク



私は、行政経験、県の農業試験場そして農林水産省・独法の農業研究所で技術の評価研究、研究・組織管理に携わり自然科学系の研究組織に所属しながら技術と経営を戦略的に結ぶ経営革新MOT (Management of Technology) を実践してきた。また、平成14年に創設された「農林水産研究高度化事業」以来10年以上にわたり競争的研究資金申請を支援してきた経歴があり、この間、最後まで関わった申請の資金獲得率は高いと自負している。

その秘訣として競争的研究資金への申請の「勝利の方程式」を提案している。申請者が長年暖めてきた研究成果を7月頃までにスケルトンにまとめる。申請作業だけに集中できない状況を考慮し、また高い競争倍率を突破するには早すぎる訳ではない。次の段階からコーディネータの本番である。これまでの経緯に拘らず課題全体の再構成、コンソーシアムの再構成などの冷血な他者の視点でブラッシュアップするのが10月頃である。この段階でどの水準まで狙えるか判断できる。

獨創性、新規性は読み取れるものの論理展開で説得力に欠ける内容であっても、申請者は専門家としての自信と自負からこの欠点を認めない場合もある。組織内コーディネータのような信頼関係から出発できないため、このブラッシュアップは至難の業となる。採択を目指してNPO法人のコーディネータは申請代表者とのせめぎ合いが避けられない。

次は公募要領が公表される1月初めを見越した「受験対策」に取り組む。農林水産省「実用技術開発事業」の1次書面審査の評価は、「食料・農業・農村基本計画」を踏まえて(1)科学的(2)行政が半々のウエイトで、必要性、効率性、有効性の観点から審査される。ヒアリングでは、(1)普及・

実用化、(2)地域貢献、(3)国民・社会の各ポイントが1/3の配点であり、細部にわたり抜けがないか検討する。ただ、「勝利の方程式」は理想論で、実は十分なブラッシュアップ時間が取れないことが多いのが最大の悩みであることも告白せざるを得ない。

「地域産学連携支援委託事業」を受託する中でコンタクトを増やし、産学官連携のすそ野を広げた結果、民間からの相談件数を着実に増加することができた。では、この資産を生かす次のターゲットは何か。経済成長の大きな原動力はイノベーションである。バブル景気崩壊後の日本経済の失われた20年間の生産性の停滞原因はITへの投資抑制との指摘もある。これまでも何度か農業情報化の波があり多くの情報システムが開発されてきたが、多くはいつのまにか消え去った。広げた人脈、地域情報を活用して、オープンイノベーションを軸にタブレット型コンピューター、クラウドなど技術革新の成果を取り込み、技術とともにバンク（人材、資金）を農業に呼び込みことができれば、イノベーションの障害となる農業特有の「死の谷」に橋を渡す可能性が大きい。それゆえ、これからはIT研究を大きなターゲットと考えている。

氏 名：折登 一隆（おりと かずたか）

専門分野：農業経営・経済

所属・役職：NPO法人グリーンテクノバンク 事務局長

略 歴：元北海道農業研究センター総合研究部長、研究管理監（産学官連携、バイオマスコーディネーター）、所長を歴任。現在、農研機構フェロー。

メッセージ：

専門は農業経済研究ですが、農研機構在職中から産学連携担当、バイオマスコーディネーター、競争的研究資金の獲得支援などの幅広い活動をしていましたので、この実績を生かしてコーディネーターとして北海道農業・経済の振興に貢献したいと思います。